

平成三十年度 大妻中野中学校

第一回アドバンスト入試
第一回グローバル入試

二月一日午前 問題用紙

国語

| |
|---------|
| 座 席 番 号 |
| 番 |

| |
|---------|
| 受 験 番 号 |
| 番 |
| 氏 名 |

受験上の注意

- (一) この問題用紙は表紙を含めて九ページあります。
- (二) 試験開始後ただちにページ数を確認してください。
- (三) 問題用紙、解答用紙それぞれに座席番号と受験番号と氏名を記入してください。座席番号と受験番号は算用数字で記入してください。
- (四) 試験時間は五十分です。
- (五) 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- (六) この試験は百点満点です。

□ 次の文章をよく読んで、あとの問いに答えなさい。

チャールズ・ダーウィンとその進化論の名を知らない人は少ないでしょう。それは、人間が神学の手から、生物の発達の歴史を科学のもとに取り込んだ、記念すべき構造物ともいわれます。今では子どもの遊ぶポケット・モンスターでさえ、「進化」の言葉を取り入れています。

進化論は、ダーウィンが、その大著『種の起原』で提唱したもので、生物が進化するのには「適者生存」、つまり生存に適したものがより多く子孫を残すとしたのです。ダーウィンは生物の世界を生存闘争（日本語では生存競争と訳されることが多いのですが、本来はもっと強い語感のものです）の場と見たのです。

これに対して、ダーウィンを超えることを目指した日本人がいました。京都大学の今西錦司です。今西の名を有名にしたのは、ダーウィンの「生存闘争」に対して「棲みわけ」を重視したことです。今西独自の自然観察をもとにした、「今西進化論」がダーウィンの進化論を超えたかどうか、①いろいろな意見はあとで紹介することにして、ここでは今西の人物や業績を述べることにします。

今西は動物学から出発して、生物社会学、類人猿学などに進んだスケールの大きい人です。今西は生物学者のほかに、登山家、探険家としての顔をもっていました。木原均らとカラコルム・ヒンズークシ探険隊に加わったほか、南洋、中国東北部、モンゴルなどの探険に行っています。多面性をもった人です。登山歴は数知れませんが、登山をただ趣味として楽しんだのではなく、登山によって仲間と強いきずなを結び、それが学問を研究するときにプラスになっています。登山は人の精神を鍛え、直観力を磨く、そういう意味で、登山家としての今西が、学者としての今西を強めているのです。

あ

今西錦司は一九〇二年、京都・西陣の大織元、「錦屋」の長男として生まれました。育ちも京都で、京都府立一中、第三高等学校、京都帝国大学農学部農林生物学科を一九二八年に卒業しています。前にふれた桑原武夫や西堀栄三郎は学友であり、登山の仲間・同志でした。京都大学はたいへん自由な雰囲気のあるところで、学科や学部間の垣根は極めて低いところでした。大学卒業後、今西は理学部の無給講師になりました。裕福な実家のおかげで、家賃だけでも食べてゆけたのだそうです。

今西は自由を愛して、束縛を嫌い、学内の昇進のレールに乗ることを断って、大学での無給講師の状態は十数年も続けました。その間に結婚し、子どもも生まれていました。

今西は一九四〇年に、あとで述べるカゲロウの研究で理学博士の学位をとり、一九四一年に有名な『生物の社会』（弘文堂）を出版しました。か

れはこの本を自分の遺書のようなつもりで書いたと語っています。一九四一年は太平洋戦争が始まった年で、自分の来し方行く末を思い、日本と世界の大波の中で、②一学徒としてのけじめをつけたかったのではないでしょうか。

京都大学で「主流」でなかったかれは、一九五九年、五七歳で教授になりました。人文科学研究所についたポストでした。六三歳定年の京都大学では異常に遅い昇進といえます。教授になるのを目指してあくせく研究することは、かれのもっとも嫌ったところでした。かれはそれだけ独創的な才能をもっていました。

い

今西は、研究者としてはカゲロウの幼虫の研究から出発しています。カゲロウは空中でたった一日の、はかない生命を終える昆虫として知られ、『徒然草』にもあるように、仏教の無常観をあらわすような生物です。京都人の今西が、京都近辺の賀茂川の溪流のカゲロウを調べたのは、まったく「はまっている」といふべきかもしれません。かれはカゲロウの成虫よりも幼虫の方が、いろいろな形態に分かれ、いくつかのグループに分類しやすいことに着目しました。そこで、数種の形態の違ったカゲロウの幼虫にそれぞれ生活形の違いを発見しました。カゲロウは川の流れの速さに応じて、また石ころや泥など生活の場に応じて棲みわけをしていることも観察されました。きわめて貴重な発見ということができます。かれはそこから、つぎのように結論しています。

I

「いくつかの形態的に相似た種が、相似た生活の場を棲みわけることにより、お互いに相対立しながらも、お互いが相補う立場に立って、もって一つの生活形社会を構成している。」

こんなふうにしてとらえられた「棲みわけ」の概念を、かれは植物にも適用します。日本の北アルプスの高木にも、棲みわけはあるということです。こういう山地では、高度による垂直分布に違いが出てきます。

かれは、探険家として内モンゴルや、南洋のポナペ島、中国東北部を訪れたほか、ネパールやカラコルムに出かけますが、この棲みわけの理論を各地で検証してゆきました。

今西は動物の社会についてはつぎのように考えています。

「群れをつくるものであっても、またなわばりをつくっておなじ種の仲間を排除するものであっても、種を維持するための個体間関係を保っている。そこに一つの種としての社会が成り立っている。」

群れをつくっている動物に「ゆるい社会関係」があると考えるのは容易ですが、従来は、なわばりをつくるものでは社会関係があるとは考えられていませんでした。これはひとつのすぐれた見解です。生態学から社会学へという展開があります。

今西のいう棲みわけは、ダーウインの生存闘争と違った発想ですが、今西自身は競争がないといっているわけではありません。それを包含した生物社会に着目しています。ダーウインの進化論では、生存闘争による自然淘汰を生物進化の原動力とするのですが、今西はそう見ていないのです。今西は棲みわけをしている集団を「種社会」とよびました。その種社会は固定的なものではありません。種社会は個として変わるといよりは、種として変わるといのです。ダーウインの流れを汲む進化論者がいうような「淘汰圧」によって導かれていません。今西は、ダーウインの「適者生存」に対して反対しています。かれはいいいます。

「生き残りはほとんどの場合純粹に偶然である。それは淘汰というよりはむしろ幸運のようなものだ。」

今西進化論では、進化とは「生物の世界全体が相互適応しつつ、しかもなお変わるべくして変わっていく」ことです。

ただ、ここで生き残りの偶然のくわしい説明はなく、変わるべくして変わってゆく原因については、述べられていません。

かれは現代的な分子生物学に立脚した人ではありませんから、木村資生のような分子生物学者のきびしい批判を受けます。

英国の「新ダーウイン主義」の学者で、L・B・ホールステッドという人がいて、一九八四年に京都にしばらく滞在しました。その間にかれは今西進化論を知りました。というのは今西の初期のカゲロウの幼虫研究の論文は英文で発表されていますが、進化論は日本語でしか書かれていなかったからです。ホールステッドは短期間に今西の論文を勉強したうえで、活発な今西批判を展開しました。かれは、「今西の著しい功績はダーウイン進化論に代わる理論に人々の目を向けたことにある」といっています。そのうえで、かれは今西の考え方は東洋的な幻想にすぎないといいました。

ホールステッドはこのように手きびしい今西批判をしたのですが、一方では今西の人物を尊敬し、かれが一種の「京都エリート」で、独創的な考えを展開できる人であることを認めました。そればかりではありません、かつては今西の共同研究者であった分子生物学者柴谷篤弘しばたあつひろと相はからって、英国の科学雑誌『ネイチャー』に今西進化論についてのさかんな誌上討論を連続で掲載しました。これにはかなりの数の科学者が参加して、活発な議論がおこなわれました。一九八五年から一九八七年にかけてのことでした。このようなことは、じつに珍しいことでした。

ただ現在、今西進化論をそのまま認める意見は少ないように思われます。分子生物学が発達したいま、③こちらの方からのさらなる検討が望まれるところです。

ここで私見をいわせてもらえらるとすれば、今西のどこか西田幾多郎にしだきたろう（『善の研究』で知られている）の哲学や東洋思想の香りのする進化論は、それ自体としては興味あるものです。淘汰圧のようなことを仮定するダーウイン進化論があるからといって、今西の論は簡単につぶれるものではないか。あるいは、進化論は、科学でありながら、思想であり、哲学でもあるのです。哲学は、単にひとつの考え方で終わるものではないか。今西の思想・哲学が、今西進化論としてあらわれたのであれば、今後の発展はありうるのではないのでしょうか。今西の後輩である松沢哲郎まつざわてつろう京大霊長類研究所教授は、今西進化論そのものより、かれの「パイオニア精神」を高く買っているのですが。また、動物保護の世界的活動で知られる動物学者

小原秀雄は、今でも今西進化論の考え方の基本は評価できるとしています。

え

今西はやがて、生態学を超えて、生物社会学や霊長類学の方向へと進んでゆきました。

今西の研究は戦後、半野生のウマの群れの研究に移りました。これは終戦前に内モンゴルのカモシカの群れを見たことがきっかけで、「種」内の群れの問題を追究したいと思ったのです。

さらに九州宮崎県の幸島のサルこうしまの生物社会学に取り組んで、画期的な発見をしました。ここの群れのサルは、えさのイモを海水で洗って食べる「イモ洗い」をするのです。これは群れのなかの一頭がはじめた行動で、それを他のサルがまねをして、群れ全体にひろがっていったのです。すなわち、明らかに群れのなかで獲得された文化的行動です。従来、断片的にサルの観察をした人はいくらもいるでしょうが、個々のサルの特徴をつかむ「個体識別」を基礎にして、学問的、系統的に研究したのは今西たちがはじめてで、そのためにこれを発見できたのです。これは世界的にも貴重な情報となりました。かれは岐阜県犬山いぬやまにサル研究の拠点としての研究所作りに尽力じんりょくしました。一九五七年に財団法人「日本モンキーセンター」ができ、そして一九六七年には「京大霊長類研究所」ができたのです。

また今西は、野生の類人猿の研究のためにアフリカにも足をのびしました。チンパンジーやボノボピグミー・チンパンジーの研究で、日本の研究は世界をリードしています。それは、かれが切りひらいた路線の上に成り立っていると言えるでしょう。河合雅雄かわい まさお（のち京大霊長類研究所長）や伊谷純一郎いたにじゅんいちろう（のち京大アフリカ地域研究センター長）ほか、現代のチンパンジーを中心とする霊長類学で輝かしい成果をあげた京大派の活躍は、忘れることができません。これらの人々は、今西の先駆者としての業績を高く評価しています。

今西は、人類社会の成り立ちを知るためには、サルや類人猿の社会を研究することが必要と考えたのでした。人類が進化のなかでサルと分かれ、独自の社会を形成した過程はどうなのでしょう。それは「社会が家族を単位として構成されている」ということで、煎じつめれば、家族の成立によって人類が誕生したということもできます。

今西は大胆で創意にみちた発想を、④ こういう問題についても提案しました。かれによると、人間家族の成立のための四条件をつぎのようにかかげました。

(1) 近親相姦きんしんそうかんがタブーになっている、(2) 族外婚がおこなわれる、(3) 地域社会が作られる、(4) 配偶者間に経済的分業が存在する。現代の人類社会は経済の発展により、いろいろの変化を受け、とりわけ目立つのは、いわゆる核家族化の進行です。その核家族が現代社会のなかで不安定化していることを、どのようにして解決すべきでしょうか。われわれは真剣に考えることが必要です。生物社会学を学ぶことはそのためにも有益なのではないでしょうか。

今西の学者以外の面ですが、前述のようにかれは登山を中学のころからはじめ、生涯に一五〇〇登山を志していました。学生時代、日本アルプスの未踏峰みとうほうをつきつぎに登り、登山家として有名になっていました。かれのはじめての著作は山に関するものでした。まとまった本として『山岳省察』さんごくしょうさつ（弘文堂）を一九四〇年に出版しています。かれはさらに外国への登山もつぎつぎに実行してゆきます。北朝鮮の白頭山ベクトウサン、ヒマラヤのマナスル、そしてアフリカのキリマンジャロなど。

かれにとって、学問と登山は一体のものでしたのです。未知のもの、はじめてのものを探る、探る対象はつねに精神の緊張を要求し、気分の高揚こうようをとめない、同志とともに達成したときの喜びは何ものにもかえがたかつたのでしよう。山に対して人間はいかに小さいか、自然に対して謙虚であれという山男の倫理りんりのようなものが、今西と仲間たちを支配していました。そのことは今西人間学においてきわめて大切なものでした。

かれには山仲間の桑原、西堀のほかにも、著名な同志がいました。民族学者で国立民族学博物館の創立に尽力した初代所長梅棹忠夫うめさねただお、文化人類学者の川喜田二郎かわきたじろう、作物の起原の研究で有名な植物学者中尾佐助なかおさすけらは、かれに協力してカラコルム木原探険隊に加わった人たちです。またアフリカの霊長類研究には、前にふれた伊谷や河合、川村俊蔵かわむらしゆんぞうなどの同志が加わり、さらに発展させました。

今西は「霊長類学の確立への貢献」によって一九七九年に文化勲章を受章しました。その主要な推進力になったのは、今西本人の業績はもちろんですが、その門下に集まった若い京大生たちでした。目先の利益や現実の利便よりも、未知のわくわくするような夢の方を選んだ人たちだったと、松沢哲郎京大教授は語っています。

今西は一九九二年、老衰のために亡くなりました。晩年に至るまで、意欲は衰えることがありませんでした。本年（二〇〇一年）今西錦司生誕百年を記念するシンポジウムが京都で開催されます。

⑤今西錦司は、今のような世相の中で、もう一度見直されなければならない日本人のひとりだと思えます。

（吉原賢二『科学に魅せられた日本人―ニッポニウムからゲノム、光通信まで―』岩波ジュニア新書より）

問一 本文中の **あ** **お** には、次の1～5の小見出しのいずれかが入ります。それぞれにふさわしい小見出しを選び、番号で答えなさい。

1. 「棲みわけ」の発展
2. 今西と山と探険
3. 生い立ち
4. 進化論に対して
5. 今西の霊長類社会学

問二 — 部①「いろいろな意見」とありますが、「今西進化論」に対してきびしい意見を述べた学者を本文中から探して一人あげなさい。

問三 — 部②「一学徒としてのけじめをつけたかった」とありますが、ということが考えられますか。次のア～エの中からその答えとして最も適切なものをつ選び、記号で答えなさい。

- ア. いつ命を落とすか分からない戦時下、一研究者としての業績を後世の人々に残したかったということ。
イ. いつ命を落とすか分からない戦時下、「錦屋」の長男として生きて証拠を残したかったということ。
ウ. いつ命を落とすか分からない戦時下、妻子を残して死んでしまうことへの未練を伝えたかったということ。
エ. いつ命を落とすか分からない戦時下、自由にものを言えない雰囲気への抗議の気持ちを伝えたかったということ。

問四 本文中の **I** に入る最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 独裁的な見解です。 イ. 独創的な見解です。
ウ. 独善的な見解です。 エ. 独断的な見解です。

問五 — 部③「こちらの方」とありますが、これの指す内容を本文中から五字以内でそのまま抜き出しなさい。

問六 — 部④「こういう問題」とありますが、これの指す内容を本文中から五字以内でそのまま抜き出しなさい。

問七 — 部⑤「今西錦司は、今のような世相の中で、もう一度見直されなければならない日本人のひとりだと思えます。」とありますが、なぜだと思いますか。あなたの考えを四十字以内で説明しなさい。なお、この文章の初版は平成十三年ですが、「今のような世相」はこの試験を実施している時点での世相と考えて構いません。

問八 次のア～オについて、本文中の内容と合うものには○を、合わないものには×をそれぞれ解答欄に記入しなさい。

- ア. 今西は、京都大学で教授になるためにあくせく研究したおかげで、教授になれた。
イ. 今西は、カゲロウの研究から導き出した「棲み分け」の概念を植物にも適用した。
ウ. 今西は、ダーウィンの「適者生存」に反対したものの、自らの見解を示すことはなかった。
エ. 今西は、生態学の研究に留まらず、生物社会学や霊長類学の研究にまで進んでいった。
オ. 今西は、中学から始めた登山がなければ多くの山仲間を得られなかったと言った。

三 次の各問いに答えなさい。

A 漢字に関する問題

問一 — 部の言葉を、漢字はその読みをひらがなで書き、カタカナは漢字に直しなさい。

- (1) ヒンプの差が少ない地域。
- (2) 公園のあたりを散歩する。
- (3) 今晚のコンダテを考える。
- (4) 初秋の雑木林。
- (5) 軒下で雨宿りをする。

問二 次の□には、傍線部の漢字を打ち消す意味の漢字が入ります。□にあてはまる漢字を答えなさい。

- (1) 火の□始末が昨夜の火事の原因だ。
- (2) その事件は□解決のままだ。
- (3) 彼の言動は□常識だ。
- (4) □念の死をとげる。
- (5) □開発の分野の研究。

B ことわざ・慣用句に関する問題

問三 次の慣用句の□にあてはまる漢字一字を答えなさい。

- (1) □載一遇 【意味】めったにないよい機会。
- (2) □を売る 【意味】むだ話をして仕事をなまける。
- (3) 言わぬが□ 【意味】言葉ではつきり言わない方が味わいがあり、差し障りもなくてよいということ。
- (4) □顔無恥 【意味】あつかましく、ずうずうしいこと。
- (5) □の空 【意味】ほかのことに心をうばわれて、目の前のことに注意がいかないこと。

C 文法・言葉遣いに関する問題

問四 「書ける」という動詞は、「書く」という動詞と比較すると、どのような意味が加わっていますか。十三字以内で説明しなさい。

問五 次の文章の言葉の使い方で正しいものには○を、間違っているものには×を解答欄に記入しなさい。

- (1) 用事があるので、今日はこれで帰らせてください。
- (2) 小さいころは苦手だったものが、今では食べられるようになった。
- (3) (お客様に対して) どうぞめしあがってください。
- (4) 先日の同窓会には、先生も参られた。

